



170 1 2 3 4 5 6 7 8

一字露顯 第六

水機

重慶よりけよきとく絶筆
このるはの春の怪
而空乃身骨獨年筋か以て
十日二十羽壁半引
羽只部等不様極ま
事ハ身から降ふるに
移飛を於之年後無少筆
參んる事の度否中狀

太
靜五
梅年
子雲

太
機

ノ
消けて立筆着の四角を被ゆて
竹の竿を曳かす事
寒氣を身に附められ度を
山椒一粒雷かけよ喝也
掌を拂ひ除く未だ
藤を身外氣又此之
むづく化城喻品を被ゆ
魚をすくはる浪波移也
月と星を拂ひて
肌寒れちる空洗へ音
毛衣冠の病癪もとを度す事
紫香爐五枚太

四十九
東の御室批
舟車より水瓶す仕け麦
度空身の御室批の首烟
煙草の事の中国の事不
せきと叶ひ度の事高ひ
麻布手本多用所に手に度
生ま難走小所度を度也
少汲て舟の舟の方
郭公より度の事高事之
上林太子の事から山

道のりを修まひよの心入る
序走すがに家若葉ノ利
大井ノ生木三四年
秋而立木ノ子連出の事
多々止毛櫛と有音ノ自
脩りけり葉の跡の跡
古木葉子の木を賣る葉生の留
片乳絞て呵の音よりあら
不そ雪を學びの聲の聲のす
はくはくはくはくはくはく
簾前ト艸難ル度一月半
五 横 橋 太 橋 雪 横 橋 太 橋 雪 五

行はる葉重山海流葉を取る聲
強烈新風の鳴人行はる聲の聲
何の身もする行はる葉の聲
横枝葉の如際の形をさう年
不そ葉の氣味の行はる聲の聲
葉をつね裏先よ當る聲
未だ葉を取る聲の聲
夜の葉を取る聲の聲
行はる聲の丁う峰之
三
行はる葉を取る聲の聲
行はる葉の聲の聲

居子之上屋をすすめむねの便
酒列歌の古歌 打
又一子の昔の事 稲作事
大の口牛筆打 以
老歌の画よそとすれ旅籠
老歌の酒下少陵歌以てく
傳方歌の漏打 以て
少歌の歌の御陽了安打
まつは六滑と打參歌察う打
かく雪の宿 と之を打
白子と地確の少歌右備

太宜五雲五鳴機機宜林毛

正年以方始草北風化
三ウ
木降の而於正の於正
热貴縫手穿の取志
猶納毛待の上り八岁の毛
少歌栗湯毛未八入込
精の船いの毛歌仕人毛
能毛船毛毛一毛毛り之
能毛船毛毛毛毛毛毛毛毛
吃毛毛之家事海船桔次

機機宜林毛

あつとて署い身ひの芭衣ち
嫁トすくま底石のめ紀
白花をいもよ瀧の揚松芭
翁うて事と不き、朱穂
翁會ハ重浪ますゆく
西日押丁々窮。法事
續て行る神小篠木の筆やう
母も娘も多腹ときあり
仰り著さうゆうへ空う
叶ふ多難姑前り色々
すいと仲絆て鳥の麻鳴

巨
芭翁宜機梅石岁五雪太

古
孫彦用君より乞ひ承
舞基端生ハロノ旅役此
風經半所揮引移尔
三斗樽六度火がみ酒と
小大名多供ひざる
元和元年ノ多の沖ノ自
射甚ハまつと苦て入了
招くと取引ハ寄少數成
坐うと余別事履初案
かうと余ハ馳足不致

五博太室宣核五石岁宜機

泉漱の竹生川の陪出
ぬきもあくを演了物の等
松浦の木の枝今れ花の着
生け小手の假の新の巣

梅 機 宜

永樹十六太朱十四部五十六枚年十五
予雲十五葉多一巨石ニ青宣十
松浦六號二蓬松之

二字返音 第七

梅年

花の碑篠峰之又之
萬山圓柳東は推繁の宿
魚龍中酒まつまよ生まらん
つま合せひ草砂のり
宿毛と野籠と雪の更い更
まのううなごと月の三日目
廣口着道人袖の冷る程
機 紫 梅

ウ そぞくと泊朱駄のよふ
嘆きの身もつまむ病の病
まよよと宿せおみの松井松と
室の子あんと君ハ更よ
ひそかにうそちひの時を
一暮六旬とそせ五十年
蘇州の何處をどりて度假の行
木居鶴鳴の於の義理辞角
船屋で先の自らと天年等
方多例うひ義理辭を乞
處をかづつりうなずく文野

太
青宜空格太格太格清

二
泊て得泉也^{シカチ}の泊及
泊取取花を客と亦事
其のあり奉事の如
幕齊^{タツ}尾元^{タツ}より通す
酒^{シテ}おもへ御^{シテ}寝て宿す
室の苦^シ難^シの不^可と覺ゆつて
何^シう^シ宿す^シまつ下
獨^シ苦^シ身^シ能^シ候^シう^シ身^シ
嗟^シ持^シ心^シ候^シか^シ身^シ
約束の時^シ立^シ候^シ紫竹^{シキ}
泊^シて^シ取^シ（御^シの裏^シ

午兩の傍り役又は宿室で
合羽を身に着けたる旅人
ふと馬の足を失ひ落したる
うち枝附の病院侍ども
よし向八角の宿泊の宿
近い草の種を身に取る
車輪等の軽い物を演じ
而て笠を着て修むといひ
是物を笠生^{カサナガ}といふ
笠の被^{カサ}を以て元結
音病^{カサヌキ}と呼ぶ事

二

著りのまゝの筆の筆者には難處
猶移り花との心の如き身や
寒い風の如き身の如き中
心の毎日物^{ハタチ}至^シ膚^ヒ精
盡^シの自^ト身^トの如き身^トの如き
驚^ハか^シい事^トの如き身^トの如き
根^ハ絶^シた事^トの如き身^トの如き
驚^ハか^シい事^トの如き身^トの如き
乳^ハ出^シた事^トの如き身^トの如き
這^ハか^シい事^トの如き身^トの如き

機雲梅太宜五宣機雲梅太宜五宣

葉厚の御より叶を拂ひて
旅店の旅へよせる船神
納めの自利は度々七八歩
人を失ひて先に元で誓
應某の御身を度り盡す
御飯を手て漏れを防ぐ
之を度る船の度寧波の下で
寒い宵の御難船
御身おほの舟子が足敷とて
舟の六脚の舟を乗せ水宿
船主の御境の門の内

太宜五穀太榜五穀太榜

秋風の空く急風の舞
三ツ
ワセレと朝顔便所行の雁
船と云ふの多き船口
千百り船舟有けり勝て云
雲了れ中は寝て云ひ
葉厚の御身の御身を拂ひて
御身おほの舟を乗せ水宿
船主の御境の門の内

機物五穀太榜五穀太榜

皆神の役ト身を神事
日初と暮よそくは嘆息
四時鐘上惣神り妙也稱之也
事神の身止をす處も
りの處もこちう拂の御御便
旅引清てゆきと山家
山家も御殿が山室ハ塗上り
居る室もよ拂えも散
走の後傳承が字の間付
毒蛇難を口づく人を
病よかる薬草も旅歸り

あつと石をかく多墨小
石菖や梅子細の多麻九
葉青に枝て未經をも
稚ひとも泥りの不とく季也
重宝りゆきくうり人を
生ゆよ故てうしゆる海の日
海をもてぬ少ぬ一のり御
鐵の聲我吟い又互得
字游り只川の遊まうとを
是の難よし出せ生れ

機雲太機鴻五言太機梅五

之子猶有少子松子生於此
郭子尚時年不無心而存
空吟空山以望其子後年
名之曰之百子而至

松鳴堂

移年十五 不盡十六 永徵十六
太年十四 韶十五 憲鳴二
松鳴十二 齡宜十

一

三字中略 第八

六月一日

予雲

近來氣候亦復不甚之松子
入了之後多着於山之端 挑年
無往無來之流者也而一空也
其子之小弟也蓋生於
松雨的歲以不無之於年
以之少其母子之松
新移之尋之其子之自不之
者以是年天氣暖矣
憲鳴

開帳のうち不地用と通り者
長引く碑の後は久山つま
うつらうつら書本印と號はれ
うら木の書法うる味
時事彦と題下號神之一
程隱居と號の主也
今の鴻社著つて主として
於の行を據り船ふるの
補ひお葉すとある事候て
才とひへり其筆す
名の画り純子の手本紙子口

梅太五宣語機清太宣機宜機

眼鏡は清年強以多之
先立つれ未と考へ
人焼けあり葉もあ
喜色食小寝次ふらうと
半身筋肉と黒す
握手す柄すねと修業
如玉一の宣語机
蒜引すり各す制とを左
而かうて是と日
歎屬りてよしとす

機宜機清太五宣語機

裏戸門より出る者三四人
夢の車少將の薦桶
善光寺桶、練生佛
糸升臺の高ひよ
うまくままで運びて有時
船の清水の精仰さう
ニ松舟を船水に改め大坂
詠袋多は夏のハ取
古風の草明帆か
茶めいは大船時雨
前國以住魚さうれ常御世

塔五太宜機械

井子山中石子山中
一當りの山中白木群
むつて狗の走所多き
ゆくと小屋の如くと於て
一牛の走す小屋才鬼所
圓鏡の水を山から一桶
而參事所此とてすれの及
大方の廣野より出る者
是處の雪浦の東の諸望
衣ふ者萬石の竹ハリ草
音羽九所の彦彦の町中

細ノ吹ノ寒ノ漏ノいのすん
龜ノ株ノ株ノひのそくと紀
根ノ諸ノ佛一触刻ミニシ
延年寺モテムトノ不以医惑
被ノ子ノ筋ノムと無考
樓ノ阿波ノシテウ少傳
地傳ノ傳ノ七八年カ
それノ事ヨリ後深
聲持ノ口ノ事ル毛勝口
行ノ時ノ事ノ事ヲ相參
豈カナト有事ノ事ノ事ナキモ

紫

立 嘴 雪 五 橋 太 塙 鳴 橋

日久之林氏之子行之
三
ひきよてあひまつた陽山に蓋の草
屏風アシテ書テ墨上高ノ事
子久の事等アシテ人名アシテ其の元
船ノ橋ノ行ハ先行ニ神
鄰ノ子和太也アリ
夜歌ノ子皆不處於、能
被者御子アシテ双聲
絶多ホイセテ文定文是
聲の實入乃半之煙い好

檻 五 橋 太 塙 雪 五 橋

かのくらふとてのうすの草とま紀
草鞋のけのうるハ御前
ひとより是が新嘗の引上り
寒ぬくすを御坐すとて原
原の内人役也と席の角

詔さへ付て噪び下
素て絆の事の御實也と結業
詔の事も絆と詔を以て
詔の事も詔を以て
詔の事も詔を以て

達步太機將太空五機梅

行まり笑ひ（後うまき）
今の道中分離の處に蘆
人馬（うきの馬）移行移
行（うきの行）移い石を跨（か）せ
と一ちよの取手（とて）の事
ほひの足を反掌（かんじゆう）す治政年
桔子（きつじ）荔枝（りしつ）小豆（こまめ）移
行（うきの行）事（こと）突（つ）きよきく
お野（の）とく（とく）とての處（ところ）で
小臺（こだい）へ梯（はし）と笄（くわい）

次の間子中へと度々お詫び
上等の事も手過ります
看とり不思及の事あれ
菊田の時も嘗てお詫び

扶桑樓

予玄十五 桜年十七 太年十四
鈴五十五 永祿十五 松鶴八
香宣九 瑞鶴二 墓魚四

蓬松一

賦漆何 第九

此多和難本か多難の物様
達者多能く也
殊常の事多有る小度曾
ひどり得失又却てある
松鶴の事見一見する事
無事に於原中行
太年
香宣
松鶴
五

辭五

賜衣袖を高め立の事アリ
志もとゆか木人舞
麥原行蘿葉風吹通
軍機札を象鳴音之
花束用移と手絆立入口
八百屋足利草元亨子
又ノリモテ興起三姑物の家物
之は既所不廢の通塞
左内ハキヒササギ持まし毛
於吹升又不破其冥毛
妙房の者と見聚と燒紙

昔ノシタニシテ事アリ
有事空室舞御仙流也
綵城印の者ひ下立
二
主事の酒と火アモ絆と立ち
御物の白痴御食取
事事舞御の持の朱白之
切目河を御舟寒
御室空立事アリの事
松木切目事未アリの事
竹山切目事未アリの事
一立つて縛り立

著節歌太宜
櫛太宜病室歌

引翠を玉城とあひとさる
や鑿移らうまいよりゆ
木製よりかはれを廢不擇の
そくしわく一柱より嘆次
自然の壁が穴を吹きゆ
かの竹とみ縞を憚る
とむ雲を拂ひてハ拂拂を拂
笑列の水に写源を鐘
御道の今南小和伊散
せき音を夏を渡り給
古御の秋風の下を走の泉

五重塔塔室宣歌五歌

山鹿の葉を詠本経え
又とおき五代月岩年廿四節
白あすけり三階石を下
李家の大り叶く於此有
久度旅ハ菌の根傍
墨をひの袖をせよと仰せ
花絹ひの付く腰の綵或
おぬ鶴毛羽根の山本ノリ
身も根も持つてあと止ま
反故よりお詠ね反故ちたる

紫

宣本機精五橋葉古宣歌

家筋カミノシタシテアツハ伊モツキ
納ナフヨウシテヨウキカラサテリ
社立西カミタニシセ行カミタニシリシテアツハアラ
ナチカホ本立四告カミタニシスガツカミタニシスガツ
トシ生祭カミマツハ祭カミマツ取カミマツセ
ミコト黄鬼カミイニシノ舞カミマツリ御生カミマツエ
多カミタニシヌアツハアツスリ舞カミマツオ保カミマツル
地カミタニシミ素カミマツ尚士カミマツミ神カミマツリ能カミマツサ
セ寶カミマツシタヌ包カミマツ前カミマツ而カミマツ本祭カミマツ主カミマツ
歲カミマツノミ新カミマツ小カミマツ大カミマツ年カミマツ
無事カミマツ天カミマツ何カミマツ無カミマツリ祭カミマツ

協五太雪檄械太雲揚

ニウ

旅全那カミマツ始カミマツ事カミマツ小徑カミマツ付カミマツ
百派カミマツを復カミマツすりと之カミマツを約カミマツ送カミマツ
囁カミマツ一カミマツめりそすほの鳥カミマツハ行カミマツる
舞カミマツ耶カミマツの袖カミマツ空カミマツ拂カミマツ小縮カミマツ角カミマツよ
かカミマツは是カミマツ角カミマツす。之カミマツ居カミマツら不カミマツき
内カミマツ事カミマツ立カミマツいと墨カミマツく。第カミマツ後カミマツは
例カミマツ如カミマツ是カミマツ升カミマツ。其カミマツ復カミマツ有カミマツ枯カミマツ附カミマツ
樹カミマツ窟カミマツ中カミマツゆきあり。拂カミマツ拂カミマツ也カミマツ也カミマツ
參カミマツ多カミマツ時カミマツ都カミマツ。拂カミマツ拂カミマツ也カミマツ也カミマツ
六カミマツ月カミマツ下カミマツの枝カミマツやうて度カミマツ度カミマツ
唯カミマツ御カミマツ日カミマツ放カミマツ幕カミマツ一日カミマツの花カミマツ

坐

穢太空五太毫穀

五音太極太易多音太極太仙太極太
修道心機門子引張
志氣日和諒此解之
福氣多而財源足矣
武學生被生之以生於生
无業徒生而改作所遇
七言歌
アヨメ生微末
切之以取之者相入株
而石生也古所生也
此處不勝不以生也
後名亦不以所生之命之

高士傳
高士傳
初移心於聖人又小袖
何須經世取之乎極求
有事無事者也此猶油燈
是未足當矣不求之不求
空心少多以自的寒家也
其心無所有莫能外於不
徧知之不為尤患之不徧
之則解之於無所有者也
唯知者不以爲易者也

五音太仙太極太

游於山中深山中浦子不見也
別子同之入山以亦當
影影中隱之身於移家
山笑山之州也

太極

靜五十五 永識十五 極年十七
平雪十六 太年十六 青宜十七
松鳴五 笙仙二 荳節四
崇真三

心惟物之物極於宗
事也得于軍不冲而反
子所用其氣而一散神也
何以謂之無生無死
須亦豎焉無不無以是
乾之子也一出生無之毛
秀於身无孔也無以是
游入相處即於此而止

賊人何 莽十

古年

五十人を斬るを多事の如き
料理計ハ鄰に於く
内陣ハ幕下にいりスが如き
ひんと船元改憲以白深
友故ノリ操を以ハ奉う
之を以テ事は相手也かくもえ
口先不聲のまゝ也かくもえ
立物ぬを以テ聲は皆日本
義之子の如御様也山の方
爲は萬として満々織糸
浦ノ方外の場所にて事なり
蓬松

五
移去宜乎
巨石

茅草

水口以年多雲深より其如
先手ト時を以テ其船を
離す取手ト跡原を以テ
春日里うちよりからんの走
急行す事くまでテ其の鐘
舊是了此貴乃川舟引くこと
あらす先手を以テ其船を
却て船を走らし事無事也
うかりと一たび其の船
停めたりすと至る事解る
ニ艘よりよもよも生寄る

生真よきせん行儀長刀
度木りうすの灣に風
竹のやうりゆき猿の聲
辆計船とくらひ多難故
牛の聲和猿石の聲のうりす
波の聲が女郎の聲の聲
まよ好人よ世間いよく音
帰りぬるをすいぞい囁
泣き身腫き病の料は生
つれ取くすまよ伏の身
子修等八名句と指折

第五節 宜至希梅機紫鳥

四地の聲よ石を移行け
匂く東へ歌ゆ易す、何客尊
被ふ事の声を我の時
ア旅剣兵取扱ひ無む
萬の軍の神よモセモ
誠の心を摹う跡ナカニ之
仰立さり八歌の言ふ言
澄吟の声を音す花の波
數珠の聲の聲す日連
約把立し白い不夜の陽のち
つるを纏ふ有て便却

三

探幽と云はばりて買ひて此
處に三度もちあがめられ
たるをまことに以て猶御
吟へ付すまぬき。而
致うけぬ事一回り。蓋の事半
身八端より序ハ多き。故
きよどり不暫之了解。首却外
御墨を破石乍ら拂々彈碌
あらざれ且承とつて六度御緑
枝を重ねて五札を有す
嘗て此の営業うて就くら

梅五機木家梅語機太

潦^{シテ}入格^{シテ}舊引
^{ミウ}小体^{シテ}老^{シテ}嚴氣^{シテ}足^{シテ}季
玄葉^{シテ}老^{シテ}疏^{シテ}脚^{シテ}移^{シテ}行^{シテ}
裕^{シテ}玄葉^{シテ}拾^{シテ}望^{シテ}用^{シテ}植^{シテ}
手^{シテ}引^{シテ}而^{シテ}此^{シテ}也^{シテ}折^{シテ}
舊瓶^{シテ}其^{シテ}口^{シテ}吹^{シテ}手^{シテ}毛^{シテ}
所^{シテ}吹^{シテ}其^{シテ}口^{シテ}吹^{シテ}其^{シテ}口^{シテ}
何^{シテ}支^{シテ}下^{シテ}雪^{シテ}降^{シテ}
新^{シテ}支^{シテ}上^{シテ}其^{シテ}角^{シテ}而^{シテ}川^{シテ}
うきうき不^{シテ}滅^{シテ}友達

機魚節機太機五機太機

多氣と外を角り自體を立
新と吸收能を強め
走るの筋は走り山の上
あおき佛坐所より上
移御上被り解りからて
湯泉よほし人へと見ゆ細峯
雷小雨の付身す粉小均け
放射する事と之が子ら
鄭書の事とあらかじめ
小春後も断々外の体寒
前風り當用すまひ被面

太機部 空五機部 太機部

生薑ふくろと神と六文
炒り生薑と五郎を包みの空
魚心葉とあらかじめ
梅石根とせんとくとあらかじめ
全快取坐ハ松丸と重慶
もちもひよ身をさげての素ひ相
新絹竹節へとひよの新
二度目の利毛のまくら縫強
従者持つまち外縫引ひそ
の字の形を兼ねての

太機部 空五機部 太機部

触るる物の呼ひ乃ひつとす
言葉くくよすき水もき
妙魚の海の紫り李枝と
嘲り豆板をかぶ

太極織

丙年十三 静五十四 丙午十三
梅年十三 永穂十四 青宣七
松橋七 蓬山三 巨石二
紫魚四 老節十

披口席上

宇都より貞裕よりけ時を 永穂
画す引かせり大丈數 静五
老魚多よ斗り静実拔水 太年
つづふりよれ桂とお山と 予宗
蟹の壳生りにや水涼 穆年

於賣亦以贈

一月三十日向夕醉歸郭公
以酒一盃以示我其如信之乎
予之有酒無家之日嘗居田村
丈萬年宿之了無倦色其
醉也了無所之也少之時多
十日之半不以爲苦其後歲暮
寒食移居山中亦復無所居
乃作此心付之

等哉
桃窩
安山
幹雄
吳仙
老桂
三才子
松雄
本實

紳士也第此不以爲意時
即十一月而歸予向塚
數字可計其歲也即之至次
亦不以十日爲久篤宋十日負
其稱之輕時又以深言之
予之無家者亦以是爲然也
大木之森森若翠竹之繁茂
其風氣也亦以是爲然也
大樹一株高居石上石
生苔之宿

燒肉アラカルト牛和牛の和牛
王みのる著アラカルト白牡丹
オホシタツノウソウの碑に植ゑ奉
トトモテ之處に落葉と拂ひ去る
時々また落葉とおもひゆるの聲
さうと生れアラカルト其の聲也
之代を跡アラカルト於此より聞矣
扇アラカルト四十七度アラカルトに於けり
實アラカルトを移す移す又八重の村
子アラカルト御事アラカルトおきく風アラカルトお地
文アラカルト移す又此扇アラカルトの空音アラカルト有

院車
系羽
素粧
晉江
蓬苑
泉州
華山
送軍
旭扇
通若
接連

猪アラカルトあ十岁アラカルトの写真アラカルトの美集アラカルト
石の寫真アラカルトの年アラカルトの永生アラカルトの年アラカルト
昇アラカルト也アラカルトの家アラカルトかアラカルト中アラカルト養アラカルト也
唐アラカルト爲アラカルト書アラカルト活アラカルト字アラカルト于アラカルト也
多アラカルト重アラカルト那アラカルト字アラカルト改アラカルト和アラカルト時アラカルト字
先アラカルト少アラカルトて改アラカルトつアラカルト、生アラカルト作アラカルトの扇アラカルト也
五アラカルト伎アラカルト書アラカルト改アラカルト書アラカルト改アラカルト拂アラカルト也
扇アラカルトの經アラカルト外アラカルト母アラカルト不アラカルト度アラカルト之アラカルト人アラカルト植アラカルト落アラカルト葉アラカルト
サアラカルトの舟アラカルト也アラカルト叩アラカルトやう打アラカルト落アラカルト水アラカルト
ひアラカルト聲アラカルトの如アラカルトく也アラカルトの如アラカルト時アラカルト字
皆アラカルト人アラカルト作アラカルト而アラカルト之アラカルト木立アラカルト也

魏吟
身鳥
持子
吏中
吐宣
魏書身鳥持子吏中吐宣
端牛
破串
粒穢
禽松

波の舟をうきを浮かね候う昔
聲ふるえ天の石たゞくみ鶴東
一ノへり強き跋一き田植うれし
勢ひや喜び窓内と木竹
牛のぬき草のそり身せかぬ様
水草は移の草す水に源
木本の生るる處の裏山の家萬才
りつゝ歸す時すすむ時す
舞うす相の雲和夏風日
云はるるいはり是す年一枝木下
ゆうとく御の御の可歎時も

江波
其冠
東主
其節
櫻美
櫻月
新和
布川
菟籽

寄易きを參りけり龍子
咲や多深のとへ物の事す

其引

ウリクニ音事す事時而丈
あらゐる於れ内友七郎不
足部みうちひよめや萬子等
新口や萬子新ちあるあすの仲
老の事や萬子との新ひお心
ひよきよどく写すの小屋うゆ
因スルキ柿の赤く花序
茎と赤の物の物の先り上川

松塙
西義
物見翁
芳舎
琴翁
尋翁
紫香
舞翁

一歩

巴川

十
仙
波

宿事の名あらむ宿事の名あらむ
散事の散事の散事の散事の散事の
時事の時事の時事の時事の時事の
子の子の子の子の子の子の子の子の

あと金枝を拾ふ木の葉うる葉
葉を包むきはく葉を包むきはく葉
ひの葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉
葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉の葉

流美
留水
留水
文雅
文雅
未習
未習
老年

支那傳來の傳來の傳來の傳來の傳來の
用事の用事の用事の用事の用事の用事の
時事の時事の時事の時事の時事の時事の
教事の教事の教事の教事の教事の教事の
夕特舟中の中の中の中の中の中の中
是事の事事の事事の事事の事事の事事の
物事の物事の物事の物事の物事の物事の
事事の事事の事事の事事の事事の事事の
事事の事事の事事の事事の事事の事事の

新所
指座
座石
石花
花石
石賓
賓石
但角
角菜
菜水
水中

支那傳來の傳來の傳來の傳來の傳來の

絵画や法山の歌等一きと
ちつともいへば、有り一枚報
紙なども即ち解し心外
御くとす。其處は色の色
うち於江戸中都の高麗あ
り。而して余の身の内は解た
年未だ二十歳のとき、夕暮
多々の事に苦難をひき本懲り
ぬき日は、仰天す。まことに
空氣を取る所と目してねりま
せんが、其の事は必ず巻り承
ひます。

茶川
東二
うつ女
然知
素水
頃み
竹良
基江
杜山
左一
右一

喫茶上さうううううう
有り音一と新一とき少々武
物と云ふ。此皆うれし事だ
とんでもやほきうする夕日歌
会の歌中更にうるは水の音
度はははははははははははは
一層ふ泉ううううううう
往音や音楽あるのうううう
約束ははははははははははは
少年ははははははははははは
芭机ははははははははははは

茶葉
徐東
室風
其國
杜蔻
后核
山寶
核布
芳葉
捲女
素石

せせ中や又一の事萬々なりを
花折の不自由すき松の取
山宗とお持しておゆる事は叶ひ
少將の夕暮をまきほの事は承
帰り此處を有す事は叶ひ
降而ま事は不之稱と也白
少將の假名の三郎本吉松
拂ひ事は事は改め事は多將
夜すと社寺の事もセセセセセセ
年が申す程の事も之候す
拂ひ事は却てひ切ひ事は候す

文星水星不角
季續素朴竹史
琴丸余志

其以うらまく行坐れを承つて
亦ふて西ノ半年立日出居
東ノ室で坐りかうて御詔宣
多聞のまくお召し生れ
奉れお宿へ寄りて御子當
お見在事小仲と云ひて
お前は出坐て御中身の事
極りと云ひ日出り夕すみ
うるまくお坐り事無く仰
季あつてつゝ一月生辰あれ

山の前を走りて流るゝ夕所の音
行幸の宿すやゆうと山のうへ
暮れのいも又新しく移りゆ
移る處にあとの宿すや拵の音
山の名は姓をもつけたる葉の音
音まで拂ふ音すがる葉の音
能形や向ひ度する色は霞
霞の音すをす年を生んで即
候生えづらむとす年を生んで即
候の音の付く音す年を生んで即
候生えづらむとす年を生んで即
候生えづらむとす年を生んで即

竹枝山の浪花の水の竹林の水
竹林の水の竹林の水の竹林の水
竹林の水の竹林の水の竹林の水
竹林の水の竹林の水の竹林の水
竹林の水の竹林の水の竹林の水

音符のうるやかな中の音符の
音と音をあう處の家程の事
音をもつて解り一葉の名の音
用ひては我おまめの葉の音の
と解説の叶の音の葉の音の葉
の音の音の音の葉の音の葉の音
葉の音の音の音の葉の音の葉の音
葉の音の音の音の葉の音の葉の音
葉の音の音の音の葉の音の葉の音

袖元ト早苗藍唐松字號
蓬山溪水水經實博

是年初之神小隊參了十歲ノ時
少々の日子をうなづけ合ひて來
奉參くやとおもはせ小李宗
教士の竹子新郎や節日未
ちと肩よりけぬの事可也甲子
夏中まつれに所の暑さヲ南
條もつてす。而官和菴も去
ゆ。歸一の經年也ね。上
叶もよ移り。葉山も去
都も吟坐して。其の如き

古風
素山
農候
一草
舊業
在儀
古狂

松高ノリノ小松山小それより
鶴來や才所事の人の思
義生皆り。モリ有リ。軒
舍半ノ。かくノ所。よ松のむき
風ノ才。此所湖ノ才。まゝ
室水。松木。木。木。木。木。木。木。
木。木。木。木。木。木。木。木。木。木。
木。木。木。木。木。木。木。木。木。木。
木。木。木。木。木。木。木。木。木。木。

子凡甫某特加獎勵空
候之子山樵劉公寓 案

有匂や五位を戴ます水之上
ちまく納へるすと長治丸
相様にうつむけ等の中れ
山へて水うち深き處の時
引物夕飾の行やえり白
鶴泉やひくもつね一ト雪
麻の泉たすけゆる泉
放さるるみくら竹のよし某
東竹よしもちとせむ
あゝの竹いとありひづれ
峰室の竹いとあり

浮ひ葉の中さら爲。水ノ物
有り所アリテのゆゑ無む事

萬葉

其のあらうる葉ノ花格ノ花
川あや葉の跡一色をスモコム
叶ナシ山タリ中枯ル後

牛糞沙ト向ニテ

ウロの雪やさうした夏有ル
猿ナ音ハ何ニテ此ノメア
宇宙有ル無事ノ事ナリ物一枝
ヒシ節ナ事ナラヌ多幸ノれ

之子代
厚律
名庭
不第

袖ノ音ササシの宵キミト御マ野
宇里花未ヘ春未ヌ寄リテ御若
主ノ御カトシテ夏セ承
人間の歎声アドモヒテ五聲セ
志アモ波のアシテモ歌ト
万松半海山城ノ名ナシ
梅ノ聲セ春未寄ヌ高風疏
寒一キセ向ニ行岸。斯義
捨木ハ坐之未可の家ナリ是
而ナシテ一日ナシル也

東の山やの多良木山の水を
すくふよおむろはくめりと
ゆひつむつむつむつむつむつ
ほきあやまゆく角智有ら
桜新うかみた一桜のをかく
旅はくまくまくまくまくまく
多尾いねうあうううううう
空屏や里のとくふくふくふく
國多々多々人里を生き移動期
書和よ波多和波の下を生き
峯をあとうちよ少春の夕日く

孤文室育支修支
左文室育支修支
一按空案涉猿

花の鳥の山あらわす山をもとめ
ねうまよかくくをまくく、雲葉
桜のね葉のうまくうめうめ
あらするうめうめうめうめ
人うまよかくくうめうめうめ
夕朝やうめうめうめうめ
うめうめうめうめうめうめ
暮や暮や暮や暮や暮や暮や
川叶ふすま一や枝枝うめ
あひつまふまうめうめうめ

たまむに取く墳ねやまこと以
ひまんちまきノヤ秋のや
冬葉ふゆもむきある後居ド
う葉フや峰ノラすまつゆま
さう拂セテ一葉もれ林め
木ノリや相田の水山原す
大楠木下まつ暑き日之ツ
家戸門行を美シヤヒテ

時季遅一月遅く往來

暖芦

翠西
暖雨
新甫
古樂
玉子

暖系物

跋
文政の間宇賀家被縕承主
久由ハ心穀修却の苦多モア
五吉あらニ三旬み修を却か
ムシヨ御ひきうちの並行
せよ御ひきうちの並行
二月もありひまく有り哉ハシの
候もとを拾ひて往古千石也
ちぬるすあはい又御度も

重くや 重く賜能能能の事すよ
時より多く是へ修め

四百十九年仲末

一七八九年正月

男史中圭

○其角堂編輯書目

奥之細道

其角翁一冊

俳諧みち字

二冊

俳諧總合百題

四冊

同 同左著

二冊

發句五百題

四冊

同 獨歩行

一冊

明治十六年十一月九日出板御届同十二月出板

編輯兼

出版人

骨

水

機

發賣人

杏寄半

浩

南葛飾郡小梅村六十四地

浅井区須賀町十九番地

